

【出題の意図と対策】

1 文学的文章(小説)の読解です。ここでは村山由佳の『天翔る』を題材に、登場人物たちの関係や、心の動きを読み取ります。小説を読むときには、できるだけ登場人物の立場に立って、その境遇や心情に寄り添いながら読むようにしましょう。そのうえで、それぞれの設問について、何が問われているのか、選択肢などに明確な根拠があるかどうかを確認しながら解答していきましょう。

【解答】

- ① ㉔ けいこく ㉕ さえぎ(る)
- ② ウ
- ③ 熱暑と緊張の連続に疲れきった
- ④ イ
- ⑤ **例** いつものまにか本当になり、もっと強い自分になれる時が来るかもしれない(33字)
- ⑥ エ

【解説】

② ポイント《ことわざの正確な知識があるかどうか》
 ウ「武士は食わねど高楊枝」は、「たとえ貧しい境遇にあっても、貧しさを表に出さず気位を高くもつこと」という意味です。また、やせ我慢することにもいいます。これに対して、ア「笑う門には福来たる」は、「いつも笑いが絶えない家庭には幸運がやってくる」、イ「情けは人のためならず」は、「他人に親切にすれば、やがてよい報いとして自分に返ってくる」、エ「出る杭は打たれる」は、「他の人よりも才能がある人は、注目されることで不利になる」という意味です。

③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 傍線部㉔の直前にある「ここがいちばんしんどいんだ。頑張り」という漆原のことは、彼の目にまよりもが相当疲労しているように見えたということの意味しています。よって、「とても疲れている」という意味の語句を探しましょう。すると、少し前に「熱暑と緊張の連続に疲れきったまよりも、思わず力なく笑ってしまった。」という一文が見つかります。ここから指定された字数で抜き出しましょう。

④ ポイント《人物の心情を正しく理解できるかどうか》
 傍線部㉔のあとで、漆原が「馬は群れの動物だろ。一頭だけで……いつもよりうんと頑張れるってわけだ」と言っていることに着目しましょう。漆原がそのことをわざわざ口にしたのは、馬の例や「かっこ悪いところは見せられない」自分自身のことからまよりもが役立っていることを伝え、疲れきっている彼女の気持ちを奮い立たせて励まそうとしているからだと考えられます。アは「先に限界を迎えるかもしれないという自分の不安」、エは「まよりも不安をやわらげ」が本文の内容と合いません。また、ウは直後に漆原が述べている内容ではありませんが、馬の性質を理解させようとして言ったではありません。

⑤ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 漆原の言葉を聞いて、まよりもは「必死のやせ我慢を意地で保ち続けているうちに、それがいつのまにか本当になることはあるのかもしれない。……いつかそうなる時が来るかもしれない。」と感じていることに着目しましょう。ここでの「そうなる時」とは、まよりもの「へもっと強くなりたい」という思いから、もっと強い自分になれる時だとわかります。

⑥ ポイント《文章の表現の特徴を正しく理解できるかどうか》
 文章の前半部分、特に「死の森」を通過する場面で「まるで裸の人間の群れのように立ち枯れた木々」や「どこか他の惑星に來たかのような荒涼とした風景」といった比喩表現が見つかるので、選択肢エが正解だとわかります。アは「乱暴な言葉遣い」、イは「まよりもに皮肉を言う」、ウは「自分の思いと反対のことをわざと口にする」という部分がそれぞれ不適切です。

【出題の意図と対策】

2 説明的文章(随筆)の読解です。論説文ほど明確でない場合もあります。が、随筆は筆者が自分自身の体験などから得た知識をもとに、何らかの考えを述べた文章であることが一般的です。ここでは、五木寛之の『不安の力』を題材に、「こころ萎えた状態」の意外な効用について述べられています。このような文章を読むときには筆者がくり返し述べている事柄や具体例などから、筆者がどのような結論や考え方を導き出しているかを読み取りましょう。

【解答】

- ① ㉔ 初冬 ㉕ 帯(びて)
- ② D
- ③ X 他人と共感しあう(8字)
 Y 身体の免疫力
 Z バランスを取り戻す(9字)
- ④ **例** つもった雪の重みで木の枝が折れるのを防ぐこと。(23字)
- ⑤ しなやかな生命力が残っていること
- ⑥ **例** ストレスなどの重圧をかわして、こころが折れずに生きていける(29字)
- ⑦ イ

【解説】

① ㉔「帯」の訓読みは、「お(びる)」以外に「おび」もあります。
 ② ポイント《品詞の識別ができるかどうか》
 A「悲しみ」B「喜び」C「こと」はいずれも名詞です。D「できる」のみが動詞なので、正解はDになります。A「悲しみ」とB「喜び」は、それぞれ「悲しむ」「喜ぶ」という動詞の連用形がそのままの形で転じた転成名詞、C「こと」は、その語本来の意味を失って形式的に用いられる形式名詞です。
 ③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 「悲しんだり泣いたりすること」の効用については、「1」の最後の段落にまとめられています。それぞれ指定された字数で抜き出しましょう。

④ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 「3」の二つ目の段落に、「なぜ、この雪吊りをするのでしょいか。」とあることに着目しましょう。このあとにその目的が説明されています。「強くて堅い木ほど、つもった雪の重みに耐えかねて、夜中に枝が折れてしまう」ので、それを防ぐために雪吊りをするのです。

⑤ ポイント《筆者の考えを正しく理解できるかどうか》
 最終段落から、筆者は「こころ萎えた状態」が、「実はこころがしななって、いるということであり、また、しなやかな生命力が残っていることだ」と捉えてほしいと思っっていることがわかります。ここから指定された字数で抜き出しましょう。

⑥ ポイント《筆者の考えを正しく理解できるかどうか》
 筆者は「3」で述べた雪吊りの例を踏まえ、「4」では私たちのこころについて言及しています。「ただ突っ張ってばかりいると、どこかでばきんと音を立てて折れてしまう」一方で、こころが萎えた状態ではなっていれば、「重圧をスルリと滑り落としてまた元に戻るということをくり返」し、「折れずに生きていけるのではないか」と筆者は考えています。

⑦ ポイント《文章の構成と内容を読み取れているかどうか》
 本文の「1」と「2」にある、悲しんだり泣いたりすることは悪いこと、「萎えた状態はよくない」という常識的な考えに対して、筆者は「違うと思う」と述べています。よってこれに最も近い選択肢イが正解です。アは『「こころ萎えた状態」の人が多くなった』、ウは「まったく逆の具体例を示して」、エは「過去にも起きていた」という部分がそれぞれ本文の内容と合いません。

3

【出題の意図と対策】

古文とその解説文の読解問題です。ここでは、吉田兼好の『徒然草』について、上田三四二が解説を書いたものが題材になっています。古文は、かなづかいや表現法が現代文と違い、難解なものに感じられるかもしれませんが、解説をしっかりと読んで設問に答えましょう。

【解答】

- ① おもうように
 ② ア
 ③ 初心の人、くべしと思へ
 ④ X 持続と反復

Y 【例】 ただちに事を行うことはとても困難である（19字）

【現代語訳】

（第五十一段）

亀山殿の御池に大井川の水をお引き入れなさろうというので、大井の土地の民に命じられて、水車を作らせなされた。多くの銭をくださって、数日かけて作って、仕掛けたところ、まったく回らなかったため、あれこれと直してみたが、結局回ることなく、無駄に立っていた。

そこで、宇治の村人をお呼びになつて、作らせたところ、やすやすと作り上げてしまったが、（水車は）思い通りに回つて、水を汲み入れるのが大変な事であった。

何事においても、その道をわきまえている者は、すばらしいものである。（第九十二段）

ある人が、弓を射る事を習うときに、二本の矢を持つて的に向かった。師匠が言うには、「初心者は、二つの矢を持つてはいけない。後の矢をあてにして、最初の矢をいいかげんにする心があるからである。毎度、ただ、成功と失敗のことを考えず、この一矢で決めてしまおうと思いなさい」と言う。たった二本の矢を、師匠の目の前でいいかげんにしようと思うだろうか。（思わないだろう。）怠ける心は、自分では気付かなくても、師匠はこれをわかっている。この戒めは、すべてのことに通じるだろう。

道を学ぶ人は、夕方には朝があるだろうことを思い、朝には夕方があるだろうことを思って、もう一度念入りに修行しようとする。まして、一瞬の間において、怠ける心があることを知っているだろうか。現在の一瞬において、すぐさま実行する事のなんと難しいことか。

【解説】

① ポイント《かなづかいの知識があるかどうか》

歴史的かなづかいの語頭と助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直します。また、ローマ字で「an・in・on」となるところは、それぞれ「o・ya・yo」となります。この場合は、「やう (yan)」→「よう (yo)」となります。

② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》

直前に、『徒然草』における兼好の技術と芸能の道の讚美は、技術と芸能そのものよりも「とあることに着目しましょう。「心さま」とは、心の持ち方やものの考え方のことです。

③ ポイント《古文の会話文を正しく捉えられるかどうか》

「師の云はく」は、「師匠が言うには」という意味です。その直後から師匠が言った内容が始まります。そして、少しあとに「と云ふ」があるので、ここまでで会話文が終わります。「〜と（て）」は、会話の部分を探す場合の目安になります。

④ ポイント《文章の内容を正しくまとめられるかどうか》

傍線部④の直後に筆者が考える「兼好のほんとうに言いたかったこと」が述べられています。「学道の人は懈怠なく勉めるが、彼には朝があり夕べがあり、その繰り返しがある」から、「そういう持続と反復の余裕の心に持つ者」は、「油断の生じるものであることを自覚するだろうか」と筆者は考えています。だからこそ「ただちに事を行わねばならないが、そのことが実際においていかに困難であることか」という「たゞ今の一念」への兼好の思いをまとめましょう。

4

【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入れています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。発表形式の問題では、発表のテーマや発表で主張されている意見とともに、問題で用いられている資料の意図も正確に読み取ることが大切です。普段から資料を使った問題などに関心を持って、その内容や用いられている資料のポイントを頭の中でまとめる訓練をするように努めましょう。

【解答】

- ① ア・ウ（順不同）
 ② 世阿弥が芸術論を説いた「花鏡」のよく知られた一句
 ③ エ

④ 【例】 「初心忘るべからず」というのは、最初に決めた志を貫き通すという意味の「初志貫徹」に対して、物事を始めたときの未熟さや心境を忘れない姿勢のことです。例えば、習い事が上達しても始めたときの失敗を思い出し、謙虚な姿勢でいることをいいます。（100字）

【解説】

① ポイント《漢字・書写の知識があるかどうか》

行書の特徴には、筆順の変化、点画の連続、点画の省略、点画の方向や形の変化などがあります。該当の部分は、「初」の「ネ」の部分です。まず、一画目の点は、楷書ではとめますが行書でははねになっています。また、二画目から三画目が連続し、さらにそのまま「刀」の部分を書くために、点は省略され、筆順も変わっています。

② ポイント《意図のわかりやすい文章に直す力があるかどうか》

主語と述語、修飾語と被修飾語など文の組み立てにねじれがないかどうかを捉えます。もとの一文では、「よく知られた」が「世阿弥」「芸術論」「花鏡」「一句」のどれを修飾するのかわかりにくくなっています。問いでは、「初心忘るべからず」ということばが「よく知られた」ものだと伝えるように指示があります。「初心忘るべからず」は、文中では「一句」ということばで示されているのでこの直前に入れましょう。

③ ポイント《発言の内容を理解できるかどうか》

【前田さんの意見と質問】の一段落目が意見の部分です。中川さんの発表の内容について、具体的に「最近どういうところか聞いて、どう感じたかを話していた」ため、「印象に残った理由がよく伝わりました」と言っていることに着目しましょう。

④ ポイント《資料を適切に利用して、論理的な文章が書けるかどうか》

まず、【前田さんの意見と質問】の質問の内容を読み取ります。「初心忘るべからず」とはどういうことか、「初志貫徹」とはどう違うかを質問しています。次に、条件をしっかりとおさえましょう。一文目は、「資料①」資料⑤を踏まえて、「初志貫徹」と比べながら「初心忘るべからず」の意味や特徴を書きます。資料②・③から「初心忘るべからず」が「未熟さや初めての心境を忘れない姿勢」を示していることを読み取ります。また、資料④から「初志貫徹」が「最初に決めた志を貫き通すこと」であることをおさえます。これらの違いをおさえて書きましょう。

二文目は、「初心忘るべからず」の具体例（見聞きしたことや体験したことなど）を書きます。具体例を書くときは、「初心忘るべからず」が物事に取り組むときに、初めの頃の未熟さや心境を忘れないことであるということとを踏まえて、習い事や勉強、スポーツなど何か取り組んでいることを具体的に書きます。習い事を始めてから何年も経過し、それなりに力が身についたときも、始めたときに失敗したことを忘れず、謙虚な姿勢でいることなどをまとめましょう。